

はしがき

国際政治あるいは国際社会の「虚と実」を語るさい、「外交と軍人」を中心とした国際政治観にとって代わって、いまや「ブルジョワと野蛮人」言説が地球をとりまき始めている。国際政治あるいは国際社会とはいうまでもなく、ヨーロッパ諸国体制の歴史的経験のなかで「人間が築いた共同体の関係性」をさすが、いつの時代にあっても抑圧や差別、戦争、貧困、搾取などによる貧富の不平等は存在している。この矛盾に満ちた現世の光景に人びとは抵抗することもできず、社会に隠された構造を「権力」の観点から解明しようとしてきたのが近代の学知である。なかでも、冷戦構造のなかの言説空間のもとで胚胎した近代化理論はいまではしっかりと「民主化」言説に置換されている。それは国家が自律的な単位として、かつ一枚岩的な理解モデルとなりえているからにほかならない。しかも、近代世界は金融危機、恐慌、戦争、自然破壊を糧に飛躍的に発展し、国民国家や国境を超えて展開する経済あるいは資本の運動によって生き延びてきた。資本主義社会は豊かさを追い求めて、止めどない余剰をつくりだし、人間の生存そのものを危機に陥れ、環境問題を深刻化させたのである。この「豊かさ」をはき違えた貧しいまでの過剰と浪費は「欲望」の文化、「欲望」の政治化という近代性の構造によって支えられてきた。

アナル学派の創始者であるフェルナン・ブローデルは、長期的な時間軸を用いて物質文明と経済と資本主義という三層構造によって生産と交換のメカニズムが有機的に連関していることを明らかにした。有名な「日常性の構造」は日常生活をなす衣食住や人口が世界規模で連鎖していることを鮮やかにしめしたが、本書の基本的視座は日常世界に宿るグローバル化の構造を「当事者性」の観点から接近し、交換による分配の問題を国際政治力学の視点から解き明かそうとする。二元論的秩序観や「視覚の優位」の虚構性を越えて、西欧近代の政治様式が立ち現れるプロセスのもとにある「根の世界」に寄り添い、当事者の声から物事の本質をつかもうと試みた。

国際政治経済学の古典であるアルバート・ハーシュマンの『国力と外国貿易

の構造」をもちだすまでもなく、元來貿易が国際政治権力の源泉となるのは力と利害の格闘する場であるからにはかならない。くわえて、日常生活がこのシステムによって植民地化されることで歴史的時間軸の標準化に貢献してきていることを再確認しておこう。そのなかで人びとは困窮化し、諸権利を奪われ、悲惨な生活を強いられ、けっして人間としての尊厳や自立と自由、「いのち」は顧みられてはこなかったのである。

その世界のあり方、日本のあり方が問われているいま、歴史を主体的にきり拓いてきた「第三世界」の存在に眼を向けなければならない。誰もが知るように、1492年の秋、コロンブスが「新大陸」を発見したことが近代世界史における植民地主義の起点である。19世紀以降に構築された植民地支配はいまなお機能しつつある。現代における資本と労働の新たなグローバルな編成のもとでは、かつての「先進/後進」の枠組みが融解しているかにみえるものの、植民地支配から連なるむき出しの暴力と社会の分断はグローバル経済のもとで第三世界に偏在し、この枠組みの再編・強化が著しくなっている。

ところで、「仕組み」や「からくり」を言い表す「ナッツ・アンド・ボルト」(nuts & bolts)ということばをご存知であろうか。本書はまさに国際政治あるいは国際社会の基本的な仕組みや原理となるからくりを解き明かそうと編纂された。グローバルな資本主義経済が地球全体を覆い尽くすなかで歪みとともに拡大する世界市場社会の仕組みを基軸に分析している。いいかえれば、西欧先進諸国がつくりだした大量消費社会モデルがより高度化し、かつ複雑な形で地球規模に拡大したものがグローバル経済であると把握し、世界市場社会における商品/「モノ」の生産—流通—消費の連鎖構造を説き明かそうとする。

ここで取りあつかう「モノ」の視点とは、すなわち「場」の問題でもあり、異なる場の結合のあり方や「場」(=地域)の役割、資本主義経済の世界性や多面性、農業、工業、金融、貿易、消費の関係、グローバリゼーションにおける国家と社会的対立などからグローバルな権力関係や不平等の構造に接近すること、さらには問題克服のためのグローバルな市民社会の出現の有効性を考えることを基調としている。グローバリンクス (GlobeLinks) とも呼べる新たな世界政治の現実をどのような認識枠組みのもとで検討すべきかをまずはじめの [I

モノが語る世界] で論じる。II 以下では日常生活に宿るグローバル化の諸力をヒトの移動、資源、食糧、衛生的商品、紛争鉱物などの産業主義的な近代世界の相互性と再帰性の観点からそれぞれ分析している (第3章から17章)。最後のⅣでは国境を超えてグローバル化している世界をつかさどる思考原理(他者の苦しみへの責任と連帯)を展望している。そして、各章には読者にわかりやすいワードマップを設けた。いわば皆知っている事実についてただ少し角度を変えながら、現実に着想をえた物語からはじまるもうひとつの国際関係学をめざしている。

本書の構想は、2008年からはじまった「EUサブリージョンと東アジア」研究会(代表:多賀秀敏早稲田大学社会科学総合学院教授)での諸議論からうまれた。なかでも香川大学の宮島美花先生が提起された「誰が今の国際関係の「アクター」なのか?」をめぐって交わされた若手研究者らの新鮮で活発な論戦に触発されている。研究会メンバー諸氏による刺激的な諸報告にいつも感謝している。さらに、グローバル経済に翻弄され、貧困の淵に追いやられ、天災・人災によって失われた人命や自然、これら取り返せないものを取り返すためにはどうしたらよいかを考える契機は、「3・11」大震災と原発事故後に訪れたメキシコ体験にある。メキシコ革命100周年を迎えたメキシコで眼にした壁画運動の巨匠シケイロスらの作品に胸を締め上げられるような衝動に駆られた。力動感あふれる作品群に打ち震え、民衆パワーに尋常ならざる感銘をもたらしてくれたことも正直に記さねばなるまい。

とはいえ、本書の編集構想から3年の歳月が過ぎてしまったことを執筆者の皆さまと法律文化社編集部長の小西英央さんに心からお詫びしなければならぬ。くわえて、本書が新しい国際関係学の構築に少しでも役立つことを願い、ご尽力いただいた関係各位にたいして感謝を申し上げたい。

2011年4月

佐藤 幸男